



世界へ発信！



2つのユネスコ遺産

■問合せ 世界ジオパーク・縄文世界遺産推進室 (☎ 82-3663)

縄文シティサミット in とうや湖開催！



「縄文シティサミット in とうや湖」が10月7日、洞爺湖文化センターで開催されました。全国から18都市が集結し、縄文を活かしたまちづくりについて意見交換が行われました。

今回は、第1部で行われた記念講演について紹介します。講師は、伊達市で長く学芸員として活躍されていた東北芸術工科大学教授の青野友哉先生で、「縄文遺跡を通してつながる地域と人」と題して講演を行いました。

■縄文時代の交流

青野先生はまず、ヒスイや土器を例にその交流の広さを語りました。新潟県の糸魚川地域で採れるヒスイは500km以上も離れた北海道でたくさん見つかっています。数千年前の人々が、どのようなルートで運んだのか、地域同士の交流の研究に最適な資料といえるのです。

土器も同じように広い交流を示す資料です。縄文時代の終わりごろに東北地方で作られた土器と同じ特徴を持つ土器が、沖縄県で見つかりました。この土器を詳しく調べると、西日本で作られ、沖縄まで運ばれたことがわかりました。様々な資料から縄文時代にあった日本列島を縦断する、相当広い範囲の交流が見えてきます。

■引き継がれる縄文ネットワーク

現代ではどうでしょうか。青野先生は、縄文時代にあった幅広いネットワークを現代にも活かすべきと提案します。例えば縄文シティサミットは1998年から開催していますが、毎年少しずつ参加都市が増え、交流の幅が広がっています。また、2021年には北海道と北東北の17の縄文遺跡が世界遺産に登録されましたが、世界遺産になった遺跡だけが素

晴らしいわけではありません。日本列島には個性豊かな縄文遺跡がたくさんあり、それぞれに価値がある。その価値を伝えるためにどうするか、考えていく必要があります。今回の縄文シティサミットのように、他の地域の素晴らしい縄文遺跡をお互いに知ること、わが町の遺跡に誇りを持つと同じ熱量で、他の遺跡の個性と魅力を他の人たちに伝える、これを各地でやっていけば、縄文ネットワークが現代に引き継がれるのではないかと展望を語っていただきました。



▲縄文人の交流について語る青野氏

◀参加した自治体の縄文遺跡を紹介するパネル

▼パネル展示に見入る来場者

